

二〇一四年度・学力検査問題【国語】

(中学第一回)

注 意

- 一、試験時間は50分です。
- 二、答えはすべて解答用紙にはつきりと記入しなさい。
- 三、解答用紙のみ試験終了後あつめます。
- 四、問題は9ページで□・□・□の三題あります。開始の合図で必ず確認し、そろっていない場合にはすぐに手をあげなさい。
- 五、本文の表現については、作品を尊重し、そのままにしてありますが、設問の都合上、省略した部分、表記を改めた部分があります。また、特に指示のないかぎり、句読点も一字に数えます。

1～5の——線の漢字と同じ漢字をふくむものを、次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- 1 ドクソウ的な作品だ。
- 2 式をセイダイに行う。
- 3 病人をカンゴする。
- 4 コツキヨウ線を守る。
- 5 正しいケイゴを使う。
- ア 飛行機をソウジユウする。
イ 行進曲をエンソウする。
ウ ドウソウ会に出席する。
エ 文芸誌をソウカンする。
ア セイジツに対応する。
イ 選手としてのゼンセイ期。
ウ 運賃をセイサンする。
エ 作品をカンセイさせる。
ア あの場面はアツカンだ。
イ カンリヤクに述べる。
ウ 生活シユウカンを変える。
エ 入口にカンバンを出す。
ア 資料をテイキヨウする。
イ 彼はドキヨウがある。
ウ 無我のキヨウウチに達する。
エ キヨウミ深い話だった。
ア 周囲からケイエンされる。
イ カケイ図が見つかった。
ウ 会社のケイエイを手伝う。
エ テンケイ的な日本人。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中学一年生のミナコは詩が好きな生徒である。国語を担当する女性教師・坂口の提案により、ミナコのクラスは詩の朗読の授業を学校の裏庭の葡萄棚の下で行ったことがある。その時ニシムラはクラスでただ一人自作の詩を朗読した。そのような中、坂口は学校でミナコを特別扱いしているとされて周囲から注意を受けている。

午後五時を過ぎると、図書館のある森は、一気に暗さを増していく。ニシムラは、ミナコの歩調に合わせ、自転車をやつくり押しつけてゆく。ミナコは隣りをゆくニシムラのセーターに、古い本の匂いをかいだように思った。坂口の胸からも漂ってきた匂い。湿った枯れ葉のような匂い。動物ならば、坂口もミナコもニシムラも、同じ群れに属するいきものだと思う。

二人は黙って長く歩いた。ニシムラが、いきなり、坂口のことを口にした。

「前からおれ、詩が好きだったけど、坂口のおかげで、詩集をいろいろ読むようになったんだ。あいつさ、エキセントリックつつうの、ときどき、やり過ぎ？ っていうのはあったけどよ、おれは好きだったな。でも最近、気、抜けてない？ ボーレイみてえ」

「そうかな」

「知らないのか、六価クロム。土壤汚染だってよ。もう土の校庭はなくなる。裏庭も。コンクリートで、来年には、すべて固められる」

ミナコは土のない校庭を想像し、足の裏が漂白されたような気がした。かかとをどこに下ろしたらよいのか。隠されてしまう。葬られてしまう。足の裏の、柔らかな記憶が。

二人の心が一瞬にして、校庭にまで拡大し、空の高みで溶け合った。

「なら、それまでに、もう一回やろうよ」

「埋められる前にか？」

「うん」

「そうか、そうだな。そいじゃ、今度は、クラスにこだわらずに、もつと範囲を広げたらどうかかな」

「上級生も巻き込む」

「うん」

二人は計画に熱中し、図書館のある夜の森をⅡ抜けた。いつしか、大晦日の街へ出ていた。

家々には、Ⅲと外灯が点っている。外灯をつけるのは、家の中でミナコに課せられた役割だったから、灯を見ると、点灯した人のことを自然、考える。どんなひとが点灯したのか。どんなひとが住んでいるのか。

スイッチひとつのことなのに、ミナコはよく、つけるのを忘れ、母に叱られた。

外灯っていうのはね、自分のためにつけるんじゃない、他人のために点すんだよ。ここにひとがいる、生きているという合図なんだよ。外灯を見ると、ほっとするでしょう、灯のともらない街を想像してご

「おまえ、あいつに気に入られてたじゃん」

「うーん」

「いろんなこと言うやついるけど、気にスナヨ。何があったか知らねえ。おれにはどうでもいいことだ。人間は誤解のうちに死んでいくんだから。でもな、悪意あるうわさによってずたずたになるのは、たまったもんじゃねえよ」

「あの……」

「何も言わなくていいよ、何も。ただ、引き下がるな。がんがん進め。おまえは超然としてるから、なんだかんだと、いろいろ勝手なことを言われやすいんだよ、でもさ、気にすんな」

ミナコは自分がニシムラの言うように、いろいろ言われているということには気づかなかつたし、悪意のあるうわさというのにも鈍感だった。だいたいニシムラからそんなふうに見られていたということに、Ⅰと傷ついていたが、ニシムラのほうはのんきである。そんなことを言いながら、

「また、やりたいよなあ、朗読会」と言う。

「あの様子じゃ、坂口先生にはやる気はないみたいだけど」

「坂口にその気がなくなつたって、おれたちで、できないか」

「あつ、そつか、やってみようか」

「そりゃあ、クラスには、やりたくないやつも、無関心なやつもいる。だけどあんときは、けっこう、もりあがつたじゃん」

「そうだよな、楽しかったよ。また、葡萄棚の下で」

「いや、葡萄棚は取り壊されるから、他の場所を見つけなくちゃな」

「えつ、そうなの、取り壊されるの」

らんなさい、真つ暗で、どれほどさびしいことか。

母の言うことは、よく理解できた。

詩の言葉も、外灯なのかもしれない。ここにいるよ、ここに詩があるよ。ぼつ、ぼつと、それは闇のなかで合図のように光っている。朗

読会は、そんな灯りの点った、わたしたちの街だったのかもしれない。

ミナコはニシムラと、年末の街を並んで歩いていることに、心弾むものを感じていた。まだ、なんとなく話し足りない。大人だったら、こういうとき、喫茶店みたいなところへ入るのだろうと思う。いつか坂口が連れてってくれたような店とかに。

でも中学生同士、そういう場所へ、揃って入ることは躊躇があった。

宙に浮いたような気持ちでニシムラを見ると、ニシムラもまた、消化不良の顔をしている。彼もまさに、どこかに座って、朗読会について、あるいは詩について、あるいは何か別のことについて、この女の友達と、もつとしゃべっていたと思っていた。

けれど二人には場所がない。場所がどこにもないのだった。

清められたような町の交差点で、二人はいま、信号待ちをしている。青になった信号を、ニシムラが渡っていく。いっしょに渡ってもよかったのに、なぜか、ミナコは渡らなかった。

ニシムラの背中に、じゃあ、またね、と言う。

ニシムラは振り返り、すこし、意外そうな顔をしたが、一瞬のうちにあきらめて、同じように「またな」と片手をあげた。

よいお年を、なんていう都合のいい言葉は、どちらの頭にも浮かばなかった。浮かんだとしても、使えなかった。帰るところは、まだ家しか、なかった。二人の中学生は、心を残しながら、別々の場所、そ

れぞれの家族のもとへと、帰っていった。

(小池昌代『わたしたちはまだ、その場所を知らない』
河出書房新社より)

※1 エキセントリック：突飛なさま。風変わり。

※2 超然：物事にこだわらず、平然としているさま。

※3 六価クロム：環境汚染物質。

問一

I Ⅲに入る言葉として適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じ記号を二度使つてはいけません。)

ア ぼつぼつ

イ じわじわ

ウ びくびく

エ ぐんぐん

問二

線1「うーん」・線2「あの……」とありますが、ここでの「ミナコ」の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 1では坂口先生とのかを認めたほうがいいのか迷っているが、2ではそのことで周囲が悪意を持って自分を見ていたことを知り、怒りのあまり言葉を失っている。

イ 1では自分も意識していなかったことを言われて驚いているが、2では自分が傷ついていると誤解しているニシムラへの反発から話をする気をなくしている。

問五

線5「二人の心くけ合った」とありますが、これはどのようなことを表現したのですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 土の上で朗読会を開くことが、土の校庭を守るこれ以上ない方法だという二人の期待が高まったこと。

イ 土の場所がなくなるかもしれないという思いから、朗読会を開いていこうという二人の気持ちが一緒になったこと。

ウ 葡萄棚で行った朗読会が思い起こされ、二人でなら広い校庭でも朗読会を開けるといふ信頼が生まれたこと。

エ 狭い葡萄棚ではなく、校庭でやる朗読会ならば大勢の生徒が参加してくれるという二人の思いが一致したこと。

問三 線3「また、やりたいよなあ、朗読会」とありますが、

ここでの「ニシムラ」についての説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ミナコの心を傷つけたかもしれないことを思い、ミナコが喜びそうな話題に話を変えようとしている。

イ ミナコがどういう思いでいるかには気づいていないが、ミナコのことを気にかけて一心に話をしている。

ウ 再び朗読会を開くことに夢中になっており、ミナコがどのような反応を示してくれるか気にしている。

エ 元気がない坂口先生を励ますには朗読会を開くのが一番だ、という自分の思いつきを自慢げに話している。

問四 線4「足の裏が漂白されたような気がした」とありますが、

この表現は「ミナコ」のどのような気持ちをたとえたものですか。必ず「土」という言葉を用いてわかりやすく説明しなさい。

問六——線6「朗読会は（ ）しない」とありますが、その説明

として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア さびしさを嫌って人々が灯を点すように、朗読会は自分が感じるさびしさをまぎらわせ、周囲の人に助けを求めるようなものであったのかもしれないということ。

イ 坂口先生をめぐって悪意の目で見られ、誤解までされた自分が、本当の自分を皆に理解してもらえた場が朗読会であつたのかもしれないということ。

ウ 自分のためではなく、他人のために点すのが灯であるように、朗読会で自分はニシムラたちの心を明るくしていたのかもしれないということ。

エ 詩を通して自分の存在を相手に知らせ、相手の詩からその人のことを思う、そのように互いの存在を認め合う場が朗読会であつたのかもしれないということ。

問七——線7「宙に浮いたような気持ち」とありますが、その説明

明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の思いを語りきれない中途半端な気持ち。

イ 計画が上手くいくだろうかという不安な気持ち。

ウ 互いの思いが一致したという軽やかな気持ち。

エ 中学生であることに對するやりきれない気持ち。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

わたしたちは東日本大震災から何を学んだのか。自然の荒ぶる力の前には、人間がいかに無力であるか、それをたしかに思い知らされたはずだ。もはや地震や津波を予知することは不可能だと、専門家たちが認めたのです。だから、「防災から減災へ」という転換が避けがたいものとなりました。自然災害をまったく防ぎとめることはできません。たとえば、明治、昭和と大津波の被害を受けた岩手県宮古市田老地区は、「万里の長城」と呼ばれるような巨大な防潮堤をつくって備えていたわけですが、津波はそれを破壊して町を舐め尽くしました。それでは、高さが四十メートルの防潮堤を築けばいいのか。それはありえない選択です。災害を防ぐという発想を捨てるのです。そして、天災がもたらす被害を少しでもやわらげることに力を尽くすのです。こうした「防災から減災へ」という転換は、人と自然との関係についての、とても大きな問いかけを招き寄せることになるでしょう。

経済力やテクノロジーによって、自然をコントロールできると考える西洋的な発想が、限界にぶつかったのです。少なくとも日本列島を取り巻く自然風土の厳しさは、痛いほどに思い知らされました。この地震列島には、そもそも原発との共存はかぎりなく困難なテーマだったのです。あらためて、この自然風土とともに敬虔に生きる作法を学び直すしかありません。あらゆる知や学問が根底からの再編成を迫られています。それとも、忘れた振りして、確実にやって来る次の大きな震災まで、寝て過ごしますか。政治はなし崩しにそれを選ぼうとし

問八——線8「よいお年（ ）なかった」とありますが、その理由

の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 詩を通して心を通わせ、二人の無言の思いが行き交う交差点が結果的に別れの場となつてしまい、一年の終わりが二人の関係の終わりのように思われたから。

イ 次に会う約束を交わさなかった中学生の二人は、年末の別れの挨拶をしなれば、年内にまたどこかで会えるかもしれないと密かに心ときめかしていたから。

ウ 喫茶店のような場がない中学生の二人には、大晦日の別れ際に使う言葉を口にしてしまうと、二度と会えなくなつてしまふのではないかと感じられたから。

エ 話をする場がなく、話したい気持ちを抱えたままになつてしまつて二人は、うわべだけを取り繕うような言葉で、今の気持ちに区切りを付けられなかったから。

ているようですが。

ここでは、災害教育について考えてみましょう。たんなる防災教育ではなくて、あらゆる災害を死生観や自然観のレヴェルから捉えなおし、その哲学的な土台のうえに、災害とのつき合い方を学びなおすのです。人と自然との関係が揺らいでいます。建築家の伊東豊雄さんが震災後に、一本の線で自然と人間とを分けられるという建築や土木の手法は間違いだった、もっと柔らかな境界、自然に近いシステムを考えるべきだ、と語られています。熱い共感を覚えました。この流動的な境界に眼を凝らすことから、災害をめぐる教育や研究は新たな地平へと導かれてゆくことでしよう。

田老の防潮堤が無力だったわけではありません。それはわずかな時間であれ、津波から逃れるための猶予を与えてくれたはずだ。しかし、同時に油断というXも生まれていたかもしれない。海から隔てられていたために、逃げるのが遅れた人々がいたといわれています。いずれにせよ、避けがたくやってくる災害のダメージを減らすための仕掛けを、ひとつではなく複数、しかも可能なかぎり有機的に組み合わせ準備しておくことが必要なのです。

震災後、「津波でんでんこ」という言葉を、よく耳にするようになりました。十二月に亡くなられた津波災害史の研究者、山下文男さんが詳しく著書に記されています。明治二十九年に大津波が三陸を襲ったときに、家族が助け合おうとして共倒れになり、たくさん犠牲者を生んでしまった。その反省から、津波のときは、でんでんこに、つまりそれぞれ勝手に逃げるように、と語り継ぐようになったらしい。ユーモラスな語感もあつてか、広く知られるようになりました。学校

教育の現場に取り入れようという動きがあるとも聞いています。

しかし、この言葉はとても陰影の深い言葉です。**Y**にもなりかねません。下手をすると、津波に遭つたら自分のことだけ考えて逃げろという、単純な教えと受け取られるかもしれません。都会の災害現場ならば、教える必要もなく、みな「てんでんこ」に逃げることでしよう。それを面白がって称揚するのは、いかにも危ういのです。

先月、岩手県遠野市で開かれたシンポジウムのなかで、大槌町の淀川豊町長が、幼い頃に、母親から「津波のときは、てんでんこだ」と何度も言い聞かされた、と話されていました。ほんとうに哀しい教えだと思いましたね。きつと母親は息子に、いつか津波に遭つたときには、自分を捨てて逃げよ、自分を助けるためにお前までが犠牲になることは望まない、という究極の愛のメッセージを伝えていたのでしょう。

それが語り継がれねばならなかったのは、けつして「津波てんでんこ」にならない現実があつたからです。とりわけ東北では家族の絆が強いのです。介護の必要な高齢者のかたわらに留まって、津波に呑み込まれた人々がたくさんいます。九死に**Z**を得た人たちが、親や連れ合いや子どもを助けられなかったことを悔やみ、責める姿にくりかえし出会いました。多かれ少なかれ、生き延びた人たちはみな、罪障の意識に苛まれているのです。だからこそ、「津波てんでんこ」という言葉が呼び返され、求められるのです。そこには、解毒剤のような役割が託されていたのかもしれない。

こんな話を聞きました。ある集落では、とても多くの人が亡くなった。ところが、その隣りの集落では数名の犠牲者しか出さずに済んだ。見晴るかすかぎり、一軒の家もなく、土台だけが残されていました。

問一 **X**・**Z**について、次の慣用句となるようにそれぞれ適当な漢字二字の言葉を答えなさい。

X：油断 **X** Z：九死に **Z**を得る

問二 **Y**には「一方では大変役に立つが、他方では大きな害を与える危険性もあるもの」という意味を持つ言葉が入ります。最も適当な言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 対岸の火事
- イ 絵に描いた餅
- ウ 釈迦に説法
- エ 諸刃の剣

問三 線1「岩手県宮（ ）えていた」とありますが、この「防潮堤」についての筆者の考えを説明したものとして適当なものを次の中から二つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア 津波への恐怖心を取り除くためのものであったが、人間の建築技術には何の力もないことを実証した面もある。
- イ 津波から逃げる時間を多少なりとも作ることでできたが、その存在が津波への警戒心を弱めてしまった面もある。
- ウ 津波を防ぐために有効であったが、自分達の命を守ることしか考えていなかったことを明らかにした面もある。
- エ 津波の流入を防ぐために作られたものであるが、自然災害の大きさは予想しきれないことを示した面もある。
- オ 津波に遭わない安心感を与えるためのものであったが、その巨大さゆえに逆に津波の恐怖を植えつけた面もある。

奇跡としか思えません。一人の、まさしく命がけの生還を果たした男の人が、「オレたちは律儀に避難訓練をしていたからな」と話していたことが思い出されます。かれは二人目の老人を助けようとして、集落に戻り、津波に呑み込まれたのです。おそらく、どの家に寝たきりの老人がいるか、お年寄りだけの世帯はどこどこか、すべて把握していて、いざというときのシミュレーションもできていたのです。相互扶助のコミュニティが生きていて、力を合わせて生き延びたのです。

多くの現場は「てんでんこ」ではなくて、みな必死で助け合つて、ともに生き延びようとしたことでしょう。それでも、たくさん犠牲者が出たのです。だからこそ、やつとのことで生の側に留まった人々の罪障感をやわらげ、心の傷を包み込むために、「津波てんでんこ」という教えが生きてくるのかもしれない。ぎりぎりの生と死のはざまから発せられた鎮魂の嘆きに、耳を澄まさねばならないと思うのです。（赤坂憲雄『3・11から考える「この国のかたち」東北学を再建する』新潮社より）

- ※1 テクノロジー：科学技術。
- ※2 敬虔：うやまいつつしむこと。
- ※3 有機的：多くの部分が関係し合つて全体を形作っているさま。
- ※4 称揚：ほめたたえること。
- ※5 シンポジウム：ある問題についての討論会。研究発表会。
- ※6 連れ合い：配偶者。夫婦の片方が他方を呼ぶ時に使う。
- ※7 罪障：悪い行い。
- ※8 コミュニティ：地域社会。共同社会。

問四 線2「それはありえない選択です」とありますが、筆者がそのように述べる理由を説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 地震や津波の予知が不可能だと分かった今、自然災害には一切逆らわない姿勢が求められるから。
- イ 防潮堤の役割は否定できないが、自然風土の厳しい日本だけはそのとは異なる対応が必要だから。
- ウ 自然と人間とを区別し、自然災害を人間の手で完全に防ぐこととする考え方は誤っているから。
- エ 四十メートルもの防潮堤を築くことは、現時点においては経済的にも技術的にも不可能であるから。

問五 線3「避けがたとしておく」とありますが、その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 減災のための設備を何重にも準備しておくと同時に、災害に遭うことを前提とした心づもりをしておくこと。
- イ 建築物による防災対策だけではなく、西洋的な死生観や自然観に基づく新たな災害教育を施しておくこと。
- ウ 防潮堤一つでは津波は防げないため、防潮堤と同じ役割を持つ建築物を今まで以上に設置しておくこと。
- エ 防潮堤などの建築物には頼らずに、地域に住む人々同士で災害を逃れる対策をあらかじめ講じておくこと。

問六

——線4「震災後、（ ）りました」とありますが、震災後に「津波でんでんこ」という言葉が多く使われるようになった理由を筆者はどのように考えていますか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 互いに見捨てるといふ誤った教えを否定し、互いに見捨てることなく生き延びる方法を考えさせるため。

イ この言葉を地域の教えとして再び根づかせることで、亡くなってしまった人々の無念を晴らすため。

ウ 学校でこの言葉を語り継ぐことで、津波を軽視している小さい子供達にその恐怖を教えるため。

エ 昔からの教えをこれからのために再確認するとともに、生き残った人達が抱える苦しみを癒^いやしていくため。

問七

——線5「そこには（ ）れません」とありますが、「津波でんでんこ」という言葉の「解毒剤のような役割」をわかりやすく説明しなさい。

問八

——線6「こんな話を聞きました」とありますが、筆者がこの「東北」での話を通して述べようとしたことの説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 互いに助け合おうとして多くの人が亡くなってしまった心の傷は、経済力やテクノロジーに囲まれた都会の人々には理解しえないため、東北の悲しみは同じ経験を持つ人々の間で語り継いでいく必要がある。

イ 自然をコントロールしようとせず、それに従いながら生きるという死生観に基づいて避難訓練を重ね、被害を最小限に抑^{おさ}えた地域の姿を、これからの人間の生き方の理想として社会全体が見習っていく必要がある。

ウ 津波の時は各自で逃げるように教えられていたにもかかわらず、互いに助け合って被害を抑えた地域にも目を向け、そこから減災のための方法を学んでいくだけでなく、生き延びた人々の心のあり方に心を致^{いた}す必要がある。

エ 家族の絆が強い東北では、仮に生き延びたとしても苦しみは多大なものがあるので、生き残った人々の心の傷を包みこむために、その声に耳を傾けながら、安心して生活できる環境を整えていく必要がある。

【国語】

解答用紙(中学第一回)

受験番号

氏名

得点

一

1

2

3

4

5

二

問一

I

II

III

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

三

問一

X

Z

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

得点
